

執筆者紹介

おはなし・解釈のポイント

はぎわら のりこ

萩原 永子

洋光台キリスト教会 牧師

「(人の失敗やまちがいでについて、悪口をいわないのは) 優しくじゃない。それは普通のことだよ」とあるクラスで、小学生のメンバーから言われました。優しくない上、「普通」ですらない我が身を反省しきり。今期の聖書箇所が登場する人間たちには、多くの失敗とまちがいが垣間見えます。そこで吐露された言葉、背後にある想いを、丁寧に受けとめていきたいと、入稿後に今更ながら思われました。



青年成人科

ほらだ よしや

原田 義也

企救バプテスト教会 牧師

インターネットのオークションで落札した、聖書時代の土器の水差しを持っています。私が買える価格だったので、偽物なのか、それとも、鑑定書が付いているので本物なのか…。その水差しを見ながら、イシュマエル、アブラハムの僕、サムソンたちのどの渴きを癒した水を思い浮かべます。この三か月は渴きを覚える夏の暑さの日々ですが、それぞれのクラスでは、いのちの水である聖書の言葉が豊かに分かちあわれますように!



少年少女科

たなか しんや

田中 信矢

南光台キリスト教会 牧師

執筆会会議当日が「誕生日」。皆さんと外食中いきなり店内が暗くなり「ハッピーバースデー〜」の歌が。「ま、まさか!」ケーキを手にした店員が、私をスルーして他のテーブルへ。(高鳴った鼓動静まる) 暫くして再び照明が落ち、定員がまたもやケーキを手に(心拍数再上昇)…別のテーブルへ。「…」。事情を知った憐れみ深い編集部と執筆者の皆さんが最終日、その月の誕生者を祝ってケーキを差し入れてくださいました。(涙)



小学科

おおす が あやこ

大須賀 綾子

横須賀長沢キリスト教会 牧師

神さまの祝福を伝えるという、子どもたちと聖書のことばを分かち合うことの大きさに圧倒された数カ月でした。内容を考える間、私たちの教会の子どもたちを改めて意識しながら、小学生の年齢の幅も考えさせられました。今回の執筆のためにみことばに向き合うことを通して、教会の方々と、より深く一緒に聖書を読み、共に祈る恵みに預かり、本当に感謝です。



嬰幼兒科

たかい みかこ ますお やすよ もりきよこ

高井 美華子・増尾 康代・森 恭子

高崎キリスト教会 教員

これまでの執筆者も、ご家族や教会の方の協力を得て執筆されてきたことと思います。今回はあえて教会で執筆チームを組んで、嬰幼兒科を担当させていただきました。活動のアイデアを考えるのが楽しい作業になったのはもちろん、コラムでも書きましたが、今号は「死」のテーマが多い中で、子どもたちと「死」にどう向き合うかを考えることは、一人ではできないことでした。『聖書教育』に取り組むチームが起こされることを願っています。



表紙

しおやま よろこ

塩山 要子

広島キリスト教会 教員

「生きつづける」(ピルケナウ強制収容所) 「死の収容所」アウシュビッツから生還したフランクは「一心理学者の強制収容所体験」として『夜と霧』を残しました。「この悲惨な出来事を我々は知る必要があるだろうか? 知ることは超えることである。ふたたび悲劇への道を我々の日常の政治的決意の表現によって閉ざさねばならないと思う」と出版者の序にあります。(出典:『夜と霧』ヴィクトール・E・フランク(著) 池田香代子(翻訳) みすず書房)



編集後記

編集人 長尾なつみ

本誌 2018年1・2・3月号「信教の自由」についての特集記事を書いてくださった藤澤一清さんが、2018年3月に召天されました。昨年の夏に、東京バプテスト神学校の廊下でお会いしたとき「あなたは、活水(学院)で教えていたんだね。僕は、戦争のとき長崎教会にいたんだよ」と優しく声をかけてくださり、ご自身の戦争体験の綴られている『子どものとき、

戦争があった』(いのちのことば社)という本を手渡してくださいました。そこに書かれていた文章はいつもの柔和で謙遜な語り口とは違って、とても力強く迫力あるものでした。まるで「『聖書教育』で平和をしっかりと伝えてくださいよ。頑張りなさい」と言われている気がします。「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイ5:9)

